

2020年3月1日 礼拝説教要旨

詩編講解説教5 「主よ、聞いてください」

詩編5：2～13、ローマ3：9～18

今日は第5編の冒頭の部分に注目します。ここには「聞いてください」(2～4節)という言葉が繰り返されます。4節に「御前に訴え出て」とありますから、これは神さまに向かって何かを訴えている。それはこの詩人がダビデということを考えるならば、サウルや息子アブサロムといった常に自分を脅かす存在がある中で、その窮状を神さまに訴えていると理解することができます。また2節に「つぶやき」とありますが、ある訳は「うめき」とあります。この方がより切実でしょう。わたしたちはあまりうめくという経験はないかもしれませんが、人間は本当に辛い時はうめくのです。痛みとうめくということがあるでしょうし、また悔しくてうめくということもあるかもしれません。うめき声というのは、本来、言葉になっていない声のことです。ローマの信徒への手紙に「言葉にならないうめき」という表現があります。その言葉にならないうめきを聞き分けることがおできになる。それが神さまなのです。つまり、それほどに神さまは聞くことがおできになるのです。この礼拝も祈りもそれは神さまが聞いてくださることに於いて成立するものです。そうでなければ礼拝も祈りも一方的な人間の行為でしかない。それは大変虚しいものであります。神さまが聞いてくださる。そういう交わりがある。それがどれほど恵みであるのか。今日はこの第五編からそのことを考えたいと思います。

わたしたちは聞くということができているようでできていないのです。人の話を聞くこと。礼拝で説教を聞くこともそうですが、これは非常に難しいことです。聞いているようで聞いていない。分かったようでいて分かっていない。その一方で、わたしは毎月教会学校の説教をするのですが、子どもたちはわたしたち大人とはどうも違う聞き方をしているのではないかと思います。よく経験することですが、子どもはじっとしてられないので、説教中に何かをいじったり、後ろを向いたりして落ち着かない。なかなか説教に集中できない。子どもが集中する時間はせいぜい5分程度と言われています。では説教を聞いていないかという決してそんなことはない。意外と理解していることがある。後で聞いてみるとちゃんと答えたりする。大人は聞いているようで聞いていないのですが、子どもは反対で聞いていないようで聞いているのです。面白いですね。

今朝の教会学校の説教は、主イエスの語られた種まきのたとえ話だったのですが、道端も石地もいばらも結局色々なものが邪魔をして神さまの言葉を受け入れない、受け入れたとしても育たない、そういうわたしたちの心の土壌が問題になっています。だからそういう邪魔を取り除く必要がある。それは神さまの言葉を受け入れない、つまり自分を捨てること。そうでなければ本当に聞くことはできない。ルターは「己れを離れて神の前に立つ」と言いました。自分を離れる。それも同じこと。自分を離れ、自分を捨てることで神さまの御前に立つことができる。人の話を聞くことも、自分のことばかり考えていては聞けない。本当に相手のことを考えて、理解しようという思いを持って聞くこと。あるいは相手の立場に身を置いて聞くこと。そういう姿勢が大切なのです。

神さまがわたしたち人間の訴え、叫びを聞くということも、実はそういうことなのです。神さまがご自身を離れて、わたしたちの立場にお立ちになる。そういう仕方で聞いてくださる。2節「つぶやきを聞き分けてください」とあります。「聞き分ける」というのは、注意深く聞く。

具体的に耳を傾けることです。詩編130編「主よ、願わくはわが声を聞き、汝の耳をわが願いの声に傾けたまえ」そこではもはや神さまはご自分を離れている。そういう状態であること。それが神さまの聞き方なのです。

そこで思い起こすことは、神さまがご自分を離れて、真の人としてわたしたちのところに來られたことです。「キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました。人間の姿で現れ、へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順でした」（フィリピ2：6～8）これは御子の受肉、クリスマスの出来事であり、さらに十字架へと続く、キリストの地上のご生涯のことでもあります。神さまがわたしたちの叫び、うめきをお聞きになられるというのは、神さまがご自身を離れ、わたしたちの只中まで、その立場にまで身を置かれること、神さまのへりくだりの出来事にもっともよく表れています。

そのことを決定的に表している言葉が8節の「慈しみ」という言葉です。これはヘブライ語でヘセドという言葉ですが、これから詩編を読んでいく中で、おそらく何度でもこのヘセドについて紹介することになるでしょう。七十人訳（ギリシャ語の旧約聖書）ではこの言葉はエレオスという言葉になります。これは特に神さまが憐れむということで使用される言葉です。神さまがご自身を放棄されて、わたしたちのところに來られる。そのキリストの出来事に神さまの憐れみ、慈しみがもっともよく表されているのです。神さまがわたしたちの声をお聞きになられるのは、まさに神さまの憐れみ、慈しみの出来事です。

ここまでは神さまの側のことなのですが、もう一つ重要なことはわたしたちの側の姿勢です。そのように神さまがわたしの叫びを聞いてくださるといふ慈しみの中で、わたしたちもまた神さまとの深い交わりの中に置かれるのです。それはそれまでの滅びの道から救いの道に引き戻される経験と申し上げてもよいでしょう。神さまが聞いてくださるから、わたしたちも信頼して大胆に御前に近づき、うめくことができる、祈りをささげることができる。そして御言葉を聞くことができる。神さまがわたしたちを憐れみ、その声を聞いてくださる恵みの中で、わたしたちも神さまの言葉を聞く。自分を捨てて、神さまの御言葉に満たされる。例えば、この礼拝もまさに神さまが限りなく近づいてくださって聞いてくださるからこそ成り立つものであります。一週間の生活を振り返れば、わたしたちはとてもじゃないけれど、御前に立つことなどできません。けれどもそのように御前にふさわしくない者も、ただその恵みによって御前に立つのです。「しかしわたしは、深い慈しみをいただいて、あなたの家に入り、聖なる宮に向かってひれ伏し、あなたを畏れ敬います」（8節）そこにわたしたちの喜びがあり、生きる望みがあるのではないのでしょうか。

人は心を解放する場所がないと生きていけないのです。それはもちろん人と話すこともそうですが、一番大切なことは礼拝であり、祈りです。そこで神さまに向けて心を解き放つことです。

「あなたを避けどころとする者は」（12節）ここは直訳すると「あなたの中に逃げ込む者は」となります。神さまが聞いてくださる。だからここに逃げ込む。ここがシェルター。祈りの場が逃れ場なのです。そして神さまに向かって心を解放した者は、今度は人に対しても、悩みを聞き、親身になって考える相手になることができる。シェルターになれる。そういう生き方に変わっていくでしょう。